
俺と彼女の関係性

負け組

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の関係性

【Nコード】

N6725F

【作者名】

負け組

【あらすじ】

年がら年中眠い…主人公「高岡隆」の日常が高校二年の春、ある出来事から大幅な路線変更を余儀なくされる？少し変わった趣味を持つ主人公が幼馴染やクラスメートとの関わりの中で少しずつ変わっていく。

第一話 平凡な日常（前書き）

主人公の趣味について二話以降で詳しく出てきますが、こういった経験をされてない方にはわかりにくい単語等あると思いますので後書きで適宜説明やフォローをしていくつもりです。

第一話 平凡な日常

…眠い。

…とても眠い。

俺、「高岡 隆」はいつも同じ言葉を呟く。

何故眠いのか？

理由を問われるとなかなか辛い。

と言っても別に変なことをやっているわけではない。

あくまでも「趣味」で夜更かししているだけなのだ。

ただその「趣味」について詮索されるのが嫌いな私は適当な理由を言ってはぐらかす。

例えば…思いつくまま部屋の整理をやっていたとか、夜中に虫が入って来て戦ってたとか。

まあ自分でも嘘っぽいとは思っただが、他人に自分の全てを話すほどお人よしでもない。

そんな性格が災いしてか、高校二年というこのよき年にクラスで軽く浮いた存在になっている。

と言っても元々友達が多い方ではないし、クラス替えした後だからって自分から積極的に友達を作ろうなんて全く思わない。

正直その方がありがたいのだ。

知り合いが増えれば増えるほどその付き合いに比例して付き合いたくもない奴との関係も増えていくものだ。

いらぬ詮索やくだらない友達付き合いが増えるくらいなら一人でいることを選ぶ。

と言っても全く友達のいない寂しい奴と思われるのも癪だから一応紹介しておく。

昔からクラスはほとんど一緒、家も近い。

俗に言う「幼馴染」というのはいる。

何の因果か名字も近くて出席番号も毎回近い。

「おーい、何ぼーつと外見てんだよ。」

今話しかけてきたその幼馴染の名前は「竹内 学」。

こいつはいい意味で俺と正反対の人間だ。

小さい頃から運動神経抜群。サッカー部では常にレギュラー。

明朗快活、頭脳明晰…っと勉強の方は真ん中くらいだが。

友達も多く、その人気から学級委員や生徒会の経験も多い。
そして現在も学級委員をやっている（やらされている？）。

神様は何でこんな自分と正反対の人間をこんな近くに存在させたか
と思うときもあったが、こいつがいるからこそ俺は世間と隔絶せず
に生きていけるんだろうなと感じることも多い。

鼻眞目なしで学はクラスの男子で一番人気があると思う。

…ちなみに女子の一番人気は女子の学級委員の「井上 京子」だと思
う。

友達付き合いが少ない俺の耳にも井上を賛美する男の声はよく入っ
てくる。

「だから何してんだよー。」

返事をしない俺にしびれを切らしたか、学が話しかけてくる。
いつもながらテンションが高い…それがいい所でもあるんだが、半
分寝ている俺の頭にはこたえる。

「いつも通りだよ、ただ眠いだけ。」

何度言ったかわからない言葉を呟く。

「お前もさー、もっと高校二年生らしい人生歩めばいいのにな。」

「高校二年生らしいってなんだよ？」

「部活やるとか勉強頑張るとか彼女作るとかバイトするとか…」

「部活は疲れるし時間を制約されたくない。勉強は…お前よりはやってる。」

こう見えても成績は学年上位10人の常連である。

勉強の事で何かと言われるうちは極力隙を作らないように勉強だけはきっちりやっているつもりだ。

「それをここでいうかなー、まあ昔頃から勉強教えてもらってる身としてはありがたいことです。」

わざとらしく首をすくめながら学は言う。

こういう芝居がかった動きが自然に出来るのもこいつの人気の一端なのかと思う。

「彼女なんてどうでもいいし、バイトは校則違反だろ。お前は部活頑張つてればそれでいいの。」

「へいへい、わかってまーす。まあ彼女に関しては俺も同意だな。

別に今必要なわけじゃないし、こうやって男連中とつるんでる方が楽しいもんなー。」

本音が建前かわからないような話をする。

今のセリフ、クラスの女子が聞いたら泣くぞ。

外見はさわやかスポーツマン、誰彼かまわず優しく接するものだから男子にも女子にも人気があるが、女子からすると本命がわかりにくいらしくなかなか攻めていきにくいらしい。

何でそんなこと知ってるのかって？

俺に来るんだよ、仲介役をしてほしいって女子が。

その連中が口を揃えて言うんだ、「竹内君って本当は誰が好きなの?」って。

そんなこと俺にもわからない。
いや、本人に聞いたこともあるんだが、本当にいないとしか言わないんだ。

おそらく（現在は）本当にいないのだろう。
学にとって彼女というポジションはまだ頭の中に用意されていないのだと思う。

今日も何もない学校での一日が終わり、部活も何もしていない俺はさっさと帰宅した。

というか今の俺にとって一日の本番はこれからである。

とりあえず帰宅した後の日課と言えば…寝ること。

来る夜に備えて体力温存&睡眠確保のため「趣味」の時間まで大体寝ている。

それではおやすみなさい…

第一話 平凡な日常（後書き）

長編小説はこれが初めての作品です。どの程度のペースで書いていくべきなのかわかりませんが、あまり間を置かずに次々と投稿していければと思っています。

第二話 趣味（前書き）

もう少しサクサク投稿するつもりだったのですが、見れば見るほど粗が目について修正を加えていたら前回の投稿から時間がたつてしまいました… 今後はもう少しペースを上げて投稿したいと思います。

第二話 趣味

…よく寝た。

もう日付が変わるくらいの時間かな。

これからが俺の一日で一番楽しい時間の始まり。

家族も既に寝静まっているこの時間、俺はコンポの電源を入れる。

別に音楽を聴くわけではない。

もう誰も読むことがない、日付的には昨日の新聞を持ち出しペラペラめくっていく。

一面の記事や経済欄にも興味はないし、テレビ欄もテレビをほとんど見ない、というかよく言うゴールデンタイムを睡眠時間に費やしている俺には関係ない話だ。

俺が見るのはラジオの番組欄。

そう、俺の「趣味」はラジオを聴くこと…とは少し違う。

好きなラジオ番組を聴くというだけでも十分「趣味」と言えるんだろ？が、俺はそれプラス「ハガキの投稿」というのをやっている。

俺の「趣味」はラジオ番組にハガキを送ることである。

…と、そんな胸張って言うような趣味じゃないことは自分がよくわかっている。

というか、厳密に趣味と言っているいいものかもわからないが。

ただし立ち止まって考えてほしい。

一度でもラジオ番組を聞いたことがある方ならわかるであろう。

ラジオというのはDJやパーソナリティーのトークや最新から懐かしいの音楽だけで作られているものではないことを。

リスナーからのハガキというのもラジオ番組を形成する要素の中でも大きなものであることを。

…まあわからない方にはわからないと思うが。

こうして毎週欠かさずお気に入りのラジオ番組を聴き、ハガキを投稿するのが俺の趣味であるのだが、たいてい俺が好きなラジオ番組は深夜帯にやることが多いのでどうしても睡眠時間を削る（ずらす）ことをしないと聴くことが出来ない。

そしてそういった不規則な生活をしてると昼間に眠くなってしまう。

しかし今の俺にとってそんなことは些細なことではしかない。

学校の勉強なんていつでも出来るけどラジオはその時間しかやっていないのだから、優先度が違いすぎる。

だから昼間学校で眠くなるのは仕方のないことなのだ、と思っている。
勉強に関してはラジオを聞きながらやることもあるし何の問題もない。

まあ学校で眠くなる以外にも問題点はある。

ハガキ職人と名乗れるくらいだから毎週使うハガキの量も馬鹿にならない。

一枚50円で、10枚書けば500円、30枚書けば1500円、50枚書けば2500円といった具合だ。

下らない学校の決まりでバイトが出来ず小遣いだけで毎月過ごしている身としてはなかなか痛い出費である。

ただそういった手間や出費もラジオで自分のハガキが読まれた時の高揚感にはかえがたい。

ラジオという作品を形作る一つのパーツとしてリスナーのハガキはとても重要なものであると考えている。

直接ラジオに出てるわけではないけれど、番組に参加出来てるといふ喜びを感じられるんだ。

そのため俺は今日もハガキとペンを目の前に用意し、夜更かしを始める。

それにしても最近ちょっと頑張り過ぎてるかもしれないな。

というのも採用常連のラジオ番組で同じリスナーがよく読まれるようになってきたのだ。

しかもそのリスナーは住所が同じ県で女性…らしい。

らしい、というのは住所は大抵ハガキを読まれるときに都道府県まで読まれるので間違いないと思うのだが、女性というのは確証がない、というか女性と信じたくないというか…

もちろんパーソナリティがハガキを読む時に本名等見ているので女性で間違いないと思うのだが、ハガキの内容が女性らしくないというか…

おそらくその女性の周りにいる人間に対してだと思われるかなりキツイツツコミや指摘、そして時折下ネタも織り交ぜてきて…

世の中にはこんな女性もいるのかと感心してしまうほどの内容なのだ。

そんな新参者には負けてられないと今まで以上のペースで投稿しているもんだからどうしても睡眠時間にしわ寄せがきてしまう…

かといって日中学校にいる時にハガキを書くわけにもいかない。

この趣味は誰にも知られたくないのだ。

もちろんこんな趣味誰にも理解されないという自覚もあるし、誰か

に分かってほしいとは思わない。

それ以上に学校の連中にハガキの中身を知られたくないのだ。

…どうせ見たって理解できる内容じゃないしな。

これは明日も睡眠学習の時間が増えそうだ…

第二話 趣味（後書き）

改めて書くのも失礼かもしれませんが語句の説明ということで。リスナー：聴取者、ラジオを聞く人、テレビで言う視聴者ですね。DJ・パーソナリティー：どちらもラジオで喋る人なのですが、DJは音楽中心のラジオ番組の司会進行役、パーソナリティーはトーク中心のラジオ番組の司会進行役と置いていただければ大丈夫だと思います。

第三話 とある出来事（前書き）

あまり登場人物を増やしたくない（私が覚えきれないw）ので重要人物以外は全て仮名（AとかBとか）で書いていくつもりです。

第三話 とある出来事

…眠い。

…とても眠い。

相変わらずの眠気に耐えられずに学校は睡眠時間の補給場所となっている。

昨日もちよつと頑張りすぎたかな。

…そういう時に限って寝にくい授業が朝から組まれていたりするのだが。

まあいい、一日ずっとそんな授業が続く日なんてないもんさ。

寝れる授業できっちり寝ることが出来れば一日戦える、なんてな。

ぐっすり寝れる授業の後の休み時間、睡眠から目覚めた俺はボーッとした頭のまま自分の席を離れトイレに向かって歩いていった。

目も半分開いてるかどうかの状態で教室の扉に手を掛け廊下へ…

「いてっ!」「きゃっ!」

…突然の出来事で状況を把握するのに時間がかかってしまったが、
どうも廊下に出た瞬間誰かとぶつかってしまったようだ…

「ごめんな…さい」

反射的に謝りつつぶつかった相手を見ると…井上さんだ。

「あっ…しまった！」

心の中で先ほどの自分の油断を後悔していた。

このクラス、いや学年全体でもぶつかってはいけない相手ベスト5
に入るであろう人にぶつかってしまった…

冷静になつて周りを見ると、男女問わずとても痛い視線が俺に集ま
つてきている。

注目を浴びるのが好きではない俺には拷問に等しい羞恥プレーだ。

「違うんだ、わざとじゃない。偶然教室を出たタイミングが井上さ
んが教室に入るタイミングと合ってしまったってホント偶然にぶつかっ
てしまっただけなんだ。というかこれってお互いに50対50じゃ
ないのか？何で俺が100%悪いみたいになってるんだ？」

心の中にいろんなことが思い浮かんでくるが、何も言葉に出てこな
い。

先に井上さんと一緒に行動していたクラスメートの女子Aが口を開
いた。

「ちょっとあんた、気をつけなさいよ。何も確認せずに出ようとするからぶつかるんでしょー」

冷静に考えれば俺だけが悪い訳がないのだが、聞くに堪えない俺を責める言葉を容赦なく浴びせてくる。

自分の運のなさにいい加減うんざりしていたところでもう一人の当事者が口を開いた。

「あの…すみません。大丈夫でしたか？」
…信じられない言葉を聞いた気分だった。

「い、いえ、こちらこそすみません。井上さんは大丈夫ですか？」
予想もしない言葉が返ってきてしどろもどろになりながら何とか答える俺。

「よかった…私がしつかり前を見ていれば大丈夫だったんですけど…余所見していたみたいでごめんなさい。」

そんなセリフを笑顔で言われたら…これは男子に人気出るな、うん。

「こちらこそごめんなさい。もつと気をつけるべきでした。」

気を利かせたことを一つも言えない自分を恨みながらふと足元を見ると、ぶつかったときに落としたであろう井上さんの鞆が落ちていることに気づいた。

教室移動の帰りだったのだろうか、運悪く鞆を持ち歩いていた時にぶつかったらしい。

鞆が落ちた衝撃でノートや教科書が数冊床に落ちていた。

その中に不自然な葉書の束。

俺にとっては葉書を束で買うなんて日常茶飯事なことだし、それほど見慣れない状況ではないのだが、自分以外の人間が葉書の束を持ち歩いているのは見た事がない。

年賀状の時期でもなければ葉書なんてそんな使うものでもないだろうし…

とその視線に気づいたのか井上さんが手早く鞆にノートやら教科書やら葉書の束やらを片づけていく。

葉書の束について聞いたかったが何か聞いてはいけないことを聞くようであきらまれてしまった。

俺がそんな事を考えて動けないでいる間に井上さんは体勢を立て直すとか釈をして自分の席に向かっていった。

俺がほっとしたのもつかの間、学とその友人Bがすぐに駆け寄ってきて声を発する。

「井上さん何話してたんだ？」

男二人で声を八もらせながら興味津々な眼差しで聞いてくる。

「ぶつかったから謝ってただけ。」

俺はもうこの話を終わらせたい一心で一言だけ呟きその場を離れた。

「ちえー、もつと面白い展開を期待してたんだけどなあ…」

友人の無責任な言葉を背中で聞きながら自分の席へと戻った。

次の授業は元々寝られる授業ではなかったが、いつにもまして目が冴えていた。

というか学校にいる時にしては珍しく頭がはつきりしていると感じた。

やはりさっきの出来事が頭から離れないのだ。

ぶつかったことはその後の展開も含め悪夢以外の何物でもないという点で頭から離れないが、それ以上に葉書の束が気になっている。

葉書の使い道は様々あるが、あれだけの量を一度に用意する意味がわからない。

今の時期暑中見舞いには早いし、寒中見舞いやもちろん年賀状の時期ではない。

ではやはり……

懸賞の応募が趣味とか？

あれだけの量一人で使うには多いから家族の分も一緒に購入とか。

そんな家庭的な一面も覗かせてみたりってことか。

いやいや、そんなことでは騙されないぞ。

成績優秀・品行方正・才色兼備の上に良妻賢母なんて……
今までそんな完璧超人見たことない。

人間なんて表面上はどれだけ取り繕っていても裏では何を考えて何をやっているかなんてわかるもんか。

井上さんだつて普段どれだけ他人にいい顔していてもプライベートではどんな生活しているかわかったもんじゃない。

…まあ俺が知っている井上さんは完璧超人と言わざるを得ないけど。

何にせよ他人の事を詮索する趣味はない。

俺自身人に詮索されるのが嫌いだからつてのもあるが、それ以上に人のことを知りたいと思わない。

大体他人を深く知つて何になるというんだ。

せいぜいそいつの嫌な面に気づいて今後関係をどうするか迷うくらいの意味しかない。

人によつては自分から自分の事をベラベラ喋つて話のネタにする奴もいるみたいだけどな…

キーン コーン カーン コーン……

そんな事を考えていると知らないうちに授業の終わりを告げるチャイムが鳴っていた。

寝られない授業を聞き流すにはちょうどいい出来事だったな、なんて。

あんな嫌な出来事をこんな風に考えられるなんて…自分でも珍しいと思つた。

第三話 とある出来事（後書き）

前回の前書きで投稿のペース上げるとか言っておきながらこの体たらく……orzどのくらいの方が読んでいただいているかわかりませんが、週1くらいのペースで上げれるよう頑張ります。

第四話 テスト期間（前書き）

前書きって何書いていいかわかりません。 あらすじ…出来れば
お暇な時でいいので前話から見ただければ幸いです。

第四話 テスト期間

そろそろ中間テストの時期になる。

中間テストに限らずテスト期間は好きではない。

いや、決してテスト自体が嫌いなのわけではないのだが、この時期はいろいろと面倒な事が増えてくるから好きになれないんだ。

まず第一にそれなりの結果を出し続けるにはどうしてもテスト勉強に時間を割かなければならない。

普段は基本的にリアルタイムで聞いているラジオも録音に頼ることが増えてくるし、いつもなら寝ている授業もテスト前だけは重要部分の聞き洩らしが許されないため学校での睡眠補給が難しい。

そういった理由からどうしてもハガキの投稿のペースを落とすことになってしまう。

一枚一枚内容を練りこんで書いているため時間がかかってしまうことが多く、テスト期間中は普段のようなペースで投稿することが難しいのだ。

そしてもう一つの理由は…

「隆、ここなんだけどさあ。」

テスト期間は普段勉強の「ベ」の字も会話に出てこない学から多くの質問をぶつけられる期間となっている。

「た・か・しくーん、ノートを見せて欲しいんだけど。」
また増えた。

この声の主は佐藤 良美。

こいつも一応幼馴染と言えるのかな。

小学校から一緒に家も近く、昔は学と3人でよく遊んだものだ。

良美を一言で表すと「女版・学」と言うべきだろう。

小学生の頃からバスケをやっており、高校でも既にレギュラーらしい。

運動神経抜群で裏表のない性格、同性からも異性からも好かれる所も同じ。

そして勉強があまり得意でない部分まで似ている…

そんなところまで似る必要はないのになあ…なんて本人たちには言えないが。

その為テスト期間は学とともに俺に勉強について聞いてくれることが多い。

正直この二人の質問攻めがあるからテスト期間は嫌いなんだ…

まだ同じクラスの学はわかるにしても、今年は違うクラスの良美までわざわざ聞きに来る意味がわからない。

いくら昔から知ってる幼馴染とはいえ、人と話す機会を極力減らしている俺にとって学年の人気者二人に囲まれると辛いものがある。

この二人と自分との三人で話す分には何も気にならないのだが、周

りにクラスメートやその知り合いたちがいる状況で話すとなると勝手が違ってくる。

どうしても注目を浴びるし、人気者の二人の周りには人が集まる。ということとは自然と俺の周りにも人が集まるということだ。

本音を言えば「ほつといてくれ」とでも言いたいくらいだが、あの二人は何を言おうとテストが終わるまでは俺の周りを離れようしないからもう諦めている。

俺に出来ることは嵐が過ぎ去るのを待つようにテスト期間が終わることを待つだけだ。

…断わっておくが別に俺は学年でトップ争いをするほど頭がいいわけではない。

ただ学が俺に勉強を聞いてくるという理由だけで（俺から見れば）何の関係のない連中まで俺の周りに寄ってくる。

いや、厳密には俺の近くにいる学の周りに寄ってくると言った方が正しいか。

実際俺に直接話しかけてくる奴はかなりの少数派だからな。

ただ今年は去年と比べると随分マシだ。

同じクラスに井上さんがいるからだな、きつと。

井上さんは俺よりも大体上位にいる（らしい）。
本人に直接聞いたわけではないから確証はないが、俺が大体学年1

0位前後をうろつろしているのに対し井上さんは学年5位前後をキープ出来るくらいの成績らしい。

その為質問に来る人間の数がかなり分散されているようだ。

頭が良くて顔が良くて人当たりが良くて性格がいい女の子がいれば、頭はそこそこのいいようだけどあまり人と話さず外見も普通、性格は（人から見れば）根暗の俺なんて用無しだな。

最初から女子は井上さんを頼るだろうし、男連中も隙あらば井上さんとお近づきになろうとチャンスを窺っているというのが見て取れる。

もともと誰かさんのせいで一部の人間はこちらに来ているが…な、学。

「隆、ここってどうやればこの答に辿りつくんだ??わかりやすく教えてくれ。」

何度こんな言葉を学の口から聞いたかわからない。

勉強をわかりやすくしたいなら普段からもっと勉強しろと言いたい。

でも、俺が人と話すことを極力避けているように学も勉強を極力避けているとすれば人のことは言えないな。

どちらも嫌なことから逃げていることには変わらないんだから。

そう考えると人付き合いのテストがなくてよかったと心底思う。

そんなテストがあつたら常に赤点を取つてしまいそうだ。

…いや、人付き合いのテストがないなんてことはないか。

人付き合いのテストは365日、24時間常に行われているようなものだ。

でもそれは学校のテストと違って受けなければいけないものでもないのが唯一の救い。

俺みたいに人付き合いを減らせばそんなもので評価されずに済む。

もう、あんなことはこりこりだ。

第四話 テスト期間（後書き）

テストネタを書こうと思ったのはいいんですが、期末テストはまだしも中間テストがいつくらいの時期に行われるのが普通なのかかわからず季節感のないものになってしまいました…一応私の中では5月の後半のイメージで書いています。

第五話 気になること（前書き）

サブタイトルがうまく決まりません…

第五話 気になること

…眠い。

…凄く眠い、はずなのだが眠れない。

寝れない授業なわけでもない、ただ気になることがあった。

俺は無事テストを乗り切り、普段の生活に戻っていた。

いつものように深夜ラジオを聞き、いつものようにハガキを書き、いつものように夜更かしをし、いつものように学校で寝ていた。

そんな平凡な毎日をずっと過ごしていたし、これからもそんな毎日が過ぎていくと思っていた。

しかし奇妙な事があった。

というよりもある事件を蒸し返された気分だった。

それはある日のラジオを聞いていた時のこと。

自分のハガキが読まれないかなあ、と期待しつつパーソナリティーのトークに耳を傾けているとあの女のハガキが読まれた。

先を越されたか…と悔しがる間もなく、そのハガキの内容に愕然と

した。

「えー、愛知県のラジオネーム、あんずさんからのお葉書です。」

『小西さん深川さんこんばんわ』『こんばんわ。』『こんばんわ。』

「えー、『先日廊下を歩いていたらクラスの男子が教室から急に出てきてぶつかっただんです。』

漫画やアニメならその後の展開に期待するところですがそこは現実。その男の子は何か目立たないさえない人で…何となくぶつかり損でした（笑）』とお葉書を頂きました。」

「どこかで聞いた、いや体験した展開…」

俺は耳を傾けずにはいられなかった。

テスト前にあったことが今更ハガキのネタになっているのか？もう何週間も前の話なんだけど…

いや、番組のタイムスケジュール的に後回しにされたとか？

というか本当に俺のことなのか？

たまたま似たような体験をした人がいただけ？

「人とぶつかるってこともほとんどないことだけど、そこから次の展開にはねえ…」

「というかぶつかっただけ二人とも怪我はなかったのかな？女の子とすればどうせぶつかるならカッコいい人の方がいいと思うけど（笑）」

「男だってカワイイ子の方がいいよ、そりゃあ。ただ自分の好きな子とぶつかっただけでどうなるってことではないんだけど…」

「それは小西さんの体験談ですか？（笑）……」

そんなパーソナリティの話も、その後のラジオの内容も聞いているはずなのに頭には入ってこなかった。

いろんな考えが頭を廻るが明確な答えを出せないまま今に至っている。

あれが自分の身に起こったこととイコールだとすればあのハガキを投稿したあの女「あんず」は井上さんとしか考えられない。

…だがそれで結論付けられれば何の苦労も迷いもない。

井上さんがそんなキャラだとはどうしても思えない。

成績優秀・品行方正・才色兼備と彼女を賛美する言葉はいくらでも用意できるが、あんなハガキを投稿するような陰湿・陰険で人を貶めるような事が出来る人とは考えられないし、考えたくない。

実際ぶつかった後もとても丁寧な態度だったし、決して悪い雰囲気ではなかった、と思う。

いや、雰囲気気を気にしてると言うわけではない！決してそんなことはない！

…でも「同じ県」の「女性」に、自分の身に起こったことと酷似している状況があったということは事実。

今ある情報から井上さんを疑うことはいくらでもできるが、それを確かめる術がない。

まさか本人に確認するわけにはいかないし…

女の子にこちらから話しかけるなんて絶対無理だ！

話しかけただけでいい気分がしないというのに自分から話しかけるなんて…

しかも相手はあの井上さんだし…俺には無理な話だ。

ふう、これ以上この話を考えても仕方がない。

俺は俺のやれること、投稿を今まで通りやっていくことだけだ。

あ、あとは今まで以上にあの「あんず」とかいうリスナーの動向を注視していくこと。

もしかしたら違うハガキの内容から井上さんかどうか判断できる話があるかもしれないから。

…少し前はハガキの採用率だけ競ってた相手のハガキの内容を気にするようになるなんてな。

しかも相手の正体を知るには多くの情報を手に入れること、すなわち相手のハガキが多く読まれた方が好都合。

他のリスナーより一枚でも多く読みたい一心で今までハガキを書きラジオを聞いていた自分にとって、他のリスナーのハガキが採用

されることを期待するなんておかしい話だ。

でも、井上さんかどうか確認して俺はどうしようとしているんだ？

それに何の意味があると言っただ？

もし井上さん本人だったら？

井上さんに「あんな話ラジオに投稿するな」とでも言っつもりか？

そんなこと…本人に言えるわけがないじゃないか。

大体向こうは何も悪い事をしていない。

個人の名前を出しているわけでもない。

嘘を書いているわけでもない。

あくまで「俺の」気に障っただけだ。

俺が気にしなければ済むことで…

それだけのことなのに、どうしてこんなに気になるんだ。

ああ、そうか。

俺は「あんず」が井上さんでなければいいと思っているんだ。

何故か。

自分が持っている井上さんのイメージと違い過ぎるからだ。

想定外の事もあると理解するのが嫌なんだ。

でも、人間の外面程あてにならないものはない。
そんなこと…いつも自分で思っていることじゃないか。

そう、他人のことなんてそんな容易く理解出来てたまるか。

第五話 気になること（後書き）

もう今年も終わりですね。また来年もよろしくお願いいたします。

第六話 下校時の確信（前書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

第六話 下校時の確信

…眠い。

…もうとつくに眠い。

普段だったらとつくに家に帰っている時間だ。

部活はもちろん委員会やクラスの係など面倒なものは全て逃げ回ってる俺が何故こんな遅くまで学校にいるのか。

自分の一人のことだったら学校に残ってわざわざやる必要はない。家でじつくり腰を据えてやればいいだけだ。

そう、今はクラスの誰かさんの為に残っているのだ。

というよりも俺を遅くまで学校に残せる奴なんてこいつしかいないのかも…な、学。

「学、お前の担当終わったのか？もういい加減帰りたい時間なんだが…」

俺はいつも以上に疲れたような口調で話す。

「じゃあ俺の分も手伝ってくれよあ…俺の頭じゃ終わらないよ」
学は勉強のこととなると常に弱気だ。

「お前今までずっと手をつけずに放置しておいてそんなこというなよ」

俺は呆れていた。

事の始まりは先週の英語の授業。

一応それなりの進学校であるうちの高校では受験対策の一環として長文を集中的に読む授業があり、授業の前にかなり大量の予習が必要になる。

しかしそれでも予習をしない生徒も多いため、その対策として前もって受け持ちを当てられる。

しかも出席番号順で二人ずつセットで当てられるからこれがめんどくさい。

普通の授業なら自分の分を予習すればいいだけなのだが、この授業は二人分、俺の場合は学とペアで予習をしなければならない。

俺は一人で二人分やってくるほどお人よしでもないし、学の（嫌でも）勉強する機会を奪ってしまつては学の為にならないと思い、あえて自分の担当だけしかやらなかった。

予習部分をほぼ二等分、しかもしんどいと思われる部分は極力俺の担当にして学と折半したのだが…期待通りというか予想通りというか、学は全く予習をやっていなかった。

念のため前日に確認してこの事実が発覚したのだが…前日の確認では遅すぎたかもしれない。

その為テスト週間でも何でもない変なタイミングで学は部活を休むことになり、俺は家でゆっくりできる時間を使って人の勉強を見る羽目になった。

最初学は部活を休むことを良しとしなかったが、俺の機嫌がかなりよろしくない雰囲気を感じたのか適当に理由をつけて休むことにしたらしい。

…俺からすれば当然な話なのだが。

まあ他の連中なら教師に何か言われた時に事情（担当分けをしていたこと、相方だけやってこなかったこと）を説明し逃げる手もあるが、学を見捨てるわけにもいかないしな…

ただ俺は英語は決して得意教科ではないし、学もちろん苦手らしい。

そのせいで予習はなかなか進んでいかなかった。

それでも部活が終わるくらいの時間には終わりに近づいていた。学の担当範囲にも自分の担当範囲と似たような内容の文章が多く、案外いいペースで予習が進んだのが不幸中の幸いであった。

先ほどまでは運動部の練習の掛け声や吹奏楽部の楽器の音色がよく聞こえてきたが、この時間になると部活の声や音は徐々に減ってきていた。

既定の部活の時間より遅くまで練習を行う方法もあるらしいが、ほとんどの部活は大きな試合の前など重要な時期に限定されている。

まあ形だけでも甲子園を目指している野球部だけは結果を残そうが残せなかつたが部費も優先され、部活の時間も基本的にフリーでお咎めなしらしい。

俺は部活なんてものに興味が無いが、以前学が恨めしそうに話していたのをよく覚えている。

もうこの時間になると聞こえてくるのは野球部の声と音、それ以外は部活が終わった学生の話声が中心になってきていた。

「終わった。これで明日はバツチりだ」
学は相変わらずこんな調子だ。

「終わったかあ…お疲れ。ちょっと見せて」
学を信用していないわけではないが、あまりに適当だと困るので一応確認しておく。

「うわっ、俺って信用ないのな……ひどいなあ、隆は」
本当にこういった演技がかったセリフはうまい。

「はいはい、大丈夫みたいだ。じゃあさっさと帰るぞ」
俺は学のセリフを遮るように言葉を発し片づけ始めた。

二人で夕暮れの学校を後にして帰宅…といきたいところだったのだが、
「悪い、忘れ物したの思い出したから先に帰っててくれ」
と学の言葉。

ああ、と返事をしつつ何で時間をずらす必要があったんだと考えていると、今さっき部活を終えたであろうサッカー部の連中が前を歩いていた。

…そりゃあ部活サボっておいて堂々と帰れないだろうな。
しかも理由が予習つてのも馬鹿らしい。

とりあえず学にサッカー部の連中の動きをメールして、自分はお言葉に甘えて先に帰るとしよう。

そんな事を考えながら校門に向かって歩いていると前方に見たことある人が歩いていった。

その人は部活が終わった後なのだろう、同じ部活と思われる友人たちと一緒に歩いていた。

その集団は校門を出た所で分かれ、各々帰路についていた。

そのうちの一人が学校の近くにあるポストに近づいて行った。

…その動きがとても気になった。

本人と言う確証はないが、俺はその人に近づいて行った。

その人は俺に気づくことなくハガキをポストに投函していた。
少し周りを気にしながら。

が、急いでいたのか同時に複数入れようとしたのが裏目になり何枚か道に落ちた。

これを偶然というか必然というか、考え方によって変わるのだろう。
近くを通りがかったふりをして歩いていた俺の足もとにもハガキが落ちていた。

普段の自分なら気付かないふりでもして無視していただろう。

ただ今は「あの」ハガキの一件が気になっていた。
気づいた時にはそのハガキを拾っていた。

「あ、あのっ……」

そのハガキを投函していた人、井上さんが俺に声をかけようとしていた。

が、その言葉が耳に入っていないかのように俺はハガキの内容を見てしまっていた。

自分でも何でこんなことをしたんだろうか。
というよりどうしてこんなことが出来たのだろうか。

そんな気持ちになるほど自然と、まるでそうするのが当然のように体が動いていた。

そして…嫌な予感は当たっていた。
そのハガキの表、左下の方に住所と名前、そしてペンネーム「あんず」と書かれていた。

「そ、それ……」

井上さんが何か話そうとしているのはわかった。
でもそれを最後まで聞く気にはなれなかった。

俺は拾ったハガキを無言のまま井上さんに渡し、逃げるようにその場を去った。

第六話 下校時の確信（後書き）

今年も読んでくれている方々に忘れられないくらいのペースで投稿
していきたいと思います。

第七話 放課後の呼び出し（前書き）

ラジオ番組へのハガキ投稿が趣味の主人公高岡隆。前話で井上さん
「あんと気づいた彼はこれからどういった行動を取るのか。」

第七話 放課後の呼び出し

やはりそうだったのか。

当たって欲しくない予想ほどよく当たる。

あの「あんず」という名前のリスナーは井上さんだったのだ。

俺はあのあと逃げ帰るかのように家に帰り部屋に籠った。

いや、それはいつも通りじゃないのか？なんてツツコミは勘弁してくれ。

やってることはいつも通りでも精神状態が全く違う。

事実として受け入れなければならないと考える頭と現実から目を背けたい気持ちがずっと自分を悩ませている。

もちろんこういう結末になることも覚悟していた。

大体学校で教室に入ろうとした女の子が男子とぶつかるなんてそう
そうあるシチュエーションではない。

しかもテストが終わったタイミングを見計らったかのようにラジオでハガキが読まれたのも、自分と同じスケジュールで動いている人間が投稿者ということくらい少し考えればすぐに辿りつく答えだ。

それでも…それでも最後の所で井上さんをあの「あんず」と信じれ

なかった。

というか、今でも信じられない。信じたくない。

でも、俺は見てしまった。

井上さんの名前と、その横にあるPNあんずの文字を。

ああ、どうして俺はあの時あの場所にいたのだろうか。

学と時間を合わせて帰ればあの場面に出くわさずに済んだのでは？
井上さんと確証がなかったなら何も気にせずさっさと帰ればよかったのでは？

いろんな事が頭をよぎるが、それらは全て終わってしまったこと。

そして気づく「俺は何でこんなことを考えているのだろう」と。

むしろ俺はあのハガキの投稿者が誰か気になっていたんじゃないか？
たのか？

今日それがハッキリしてよかったんじゃないか。思っていたより早くわかってよかったはずだ。

…しかし、何か釈然としない。

そう、これは俺が求めていた答えではなかったんだ。

でも、これが真実。

この日は居残りで疲れていたはずなのに、頭の中をいろんな考えが駆け巡ってなかなか寝付けなかった。

そして翌日。

昨日の事が頭から離れず、家にいるときも今学校にいるときも心ここにあらずといった状態が続いている。

朝から学が昨日予習をやった授業の話をしてきたりしたが、俺は相槌を打つくらいしかできなかった。

学はそういう時決まって何も聞かずに俺をほっといてくれる。そういうのは本当にありがたいと思う。

こうしていつも通り一日は過ぎていった。

予習の甲斐もあり英語の授業も問題なく終わった。

そして放課後。

今日は何も予定がなかったのでさっさと帰ると決めていた。

学校から早く帰れたかった。

でも、何かが心の奥にひっかかっていて帰りのHRが終わってもすぐには帰らなかった。

昨日からずっと悩みに悩んだ結果、このモヤモヤを晴らすには井上さん本人に聞いてみるべきだという結論に達した。

しかし、俺にそんなことが出来るはずもなく…結局放課後まで何も動けずにきてしまった。

井上さんにこつちから話しかける事自体難易度高いのに、昨日のハガキの話をするなんて…

そつえば、昨日の事は井上さんにとってはどうだったんだろうか？

今まで自分のことで精一杯でそんなこと考えたこともなかったが、井上さんにとってもハガキを出している所は見られたくない場面だったのでは？

そこまで考えてふと周りを見渡すとほとんどの生徒は部活や委員会、または帰るために教室を出ていた。

そして、俺は気づいた。

今までずっと窓の外を見ながら考え事をしたため気付かなかったが、井上さんがこちらを見ていることに。

教室を見まわした時に一瞬目が合ったがすぐ逸らした。

目を合わせてしまったらどうしていいかわからない。

俺は何も見なかった、何にも気付かなかったように席を立ち教室から出ようと扉に向けて歩いて行った。

もうすぐこの空間から脱出出来る、と思った瞬間後ろから声がかかった。

「高岡君っ、ちょっと待って」

何と井上さんの方から声がかかった。

もう教室には数人しか残っていなかったが、その全ての視線が俺と井上さんに集中した。

俺が何も返事できずに立ち止まっていると、井上さんは帰り支度を手早く済ませこちらにやってきてこう言った。

「高岡君、今から少し時間ある？」

そんな大きな声ではなかったが、教室内の人間には聞こえてしまったようだ。

一気に周りの雰囲気がおかしくなったのが伝わってくる。

「あ、ああ、特に予定はないけど……」

自分でも声が震えているのがわかる。

普段から人と極力話さないようにしているせいか、はたまた相手が井上さんだから緊張しすぎてよくわからなくなっている。

「昨日の件でちょっと話したくて……私も部活があるから10分くらいになるけど」

「俺は全然かまわないけど……」

「じゃあちよつとついてきて」

と、先に歩きだした井上さんについていく。

後ろでは井上さんの行動を不思議がっているのかクラスメートのざわめきが聞こえていた。

その間俺は正直何も考えられなかった。

昨日からずっと悩んでいたことが嘘みたいのに、今は頭の中が空っぽになったようだった。

ただ今の状況を整理して、自分を落ち着かせるので手一杯の状態だった。

第七話 放課後の呼び出し（後書き）

2ヶ月前に買ったばかりのPCが壊れました。今古いPCを使っています。がスペック低すぎてかなりしんどいです。って後書きはこんな愚痴を書く場所ではないんでしょうね（笑）

第八話 放課後の対話（前書き）

突然井上さんに呼び出される主人公高岡 隆。この後二人の間に何が……ってあまり期待されること書くと誇大広告になっちゃいますね（笑）

第八話 放課後の対話

放課後、突如井上さんに呼ばれた俺は彼女が歩いていくままについていった。

そして今、二人は教室棟から渡り廊下を通り別の校舎の空き教室にいた。

「時間を取らせてごめんなさい。話と言うのは昨日の事です」

井上さんは俺をまっすぐ見つめてハッキリとした口調でそう言った。

「昨日の事って…下校の時の、事？」

俺もその話をする機会を窺っていたんだから千載一遇のチャンスのはずなのだが、先ほどから思考が停止しているかのごとくまともに話せていないのが自分でもわかる。

「そう、昨日ハガキを拾ったとき手元で見えていたと思うんだけど…何を見ていたんですか？」

ハッキリと、そして曖昧な答えを許さないという強い意志がこもった言葉に聞こえた。

このとき俺はようやく気付いた。

昨日の一件は井上さんにとっても大きな出来事であったことを。

そして先ほどの質問から察するに、見られたくないものを見られてしまったという雰囲気はひしひしと伝わってくる。

これは迂闊な答えは出来ないと思ったが、全てを正直にさらけ出す

つもりもなかった。

「見たというより見えたと言う方が正しいんだけど、ハガキの送り先とかは見た」

実際はPNなどしつかり見ているんだが、あまり深く突っ込まれるのも後々面倒だと思ったので偶然見えた事をアピールし、何も気にしていないようなフリをしようと考えた。

「そう、なんですか。でも、高岡君は何であんなに必死だったんですか？」

とても落ち着いていた口調でそう言った。

「必死って、何が？」

もう何がなんだかわからない状態で、そう返すので精一杯だった。

「昨日ハガキを拾ってくれた後、すぐに帰ってしまったから。まるでその場にいたくないかのように見えて……」

井上さんはとても落ち着いていた。

「き、昨日はちょっと用事があって、学校に残ってて……時間も遅くなってたし、早く帰りたかったし……」

俺はもう何を言っているかわからなかった。

「私、何か高岡君に悪いことをしたの？昨日の様子が気になって……」
今ようやく気づいたことがある。

井上さんは今までずっと落ち着いていたように見えていたが、昨日の俺の行動が気になっていたんだ。

それはそうだろう。

井上さんにとって周りの人は自分を慕う人ばかり。

人が集まってくることはあっても自分から人が逃げていくことなんてなかったはずだ。

昨日のこともハガキを見られたかどうかというよりも、その後の俺が逃げるようにして帰ったことを気にしているようだ。

それは当然の事。

井上さんから見たら自分の落としたハガキを拾った人間が逃げるように去っていったら意味がわからないだろう。

でも、それでも俺は…

「どうして…どうしてあんなことを書いたんだよ」

俺はずっと心の中にくすぶっていた思いをぶちまけていた。

「えっ、それはどういう…?」

井上さんは何もわからない、というような表情でそういった。

それはそうだ。

井上さんは何も知らない。

俺は自分でラジオを聞いていて、あんずというリスナーを知っていた。

井上さんは俺がラジオを聞いていることを知らないし、俺がラジオにハガキ投稿していることも知らない。

その上俺は勝手に「あんず」をライバル視して、勝手なイメージを作り上げていた。

俺は自分にとって嫌な出来事をラジオに投稿され、はっきり言っていない気分ではなかった。

井上さんはただ自分に起こったことが珍しいことだったためラジオに投稿した。おそらく井上さんに悪気はなかっただろうし、ぶつかったこともそれほど大きな出来事ではなかったのだろう。

本当に嫌なことならあんな風にハガキに書くことは出来ないだろうから。

俺と井上さんでは状況が全く違うのに俺の考えている事を理解しろというのが無理だ。

でも、俺はもう気持ちがあふれるのを止められなかった。

「俺はっ、俺も…あのラジオを聞いていた。あ、今も聞いているけど…」

自分でも何を話しているかわからなかった、が口から出る言葉を何とか文章にしようと努力していた。

「えっ……そう、だったんだ…」

井上さんは変わらない口調でそう言った。

「だから、昨日ハガキを拾ったときに見たんだ。井上さんが『あんず』だったことを。それで、俺もハガキ投稿してて、前から気になっ

てて…でも、何か信じられなくて…」
どうしてこんなことを話しているのだろうか。俺は本音なんてずっと誰にも話してなかったのに。

何でこんな時に、こんな事を井上さんに話しているのだろうか。

もつといろいろ言いたいことがあったはずなのに、何にも出てこない…

「ハガキ投稿って、えっ、え？それってどういう…高岡君もハガキ書いてるの？」

途端に井上さんの話し方が変わった。本気で驚いているようだ。

その姿がいつもの井上さんとは違っていて、何か可笑しかった。

「うん、俺もずっとハガキの投稿してる。それで、井上さんのことも…というか『あんず』のことだけど、ラジオで何度か読まれてるのを聞いたことがある」

俺はここに来てようやく落ち着いてきた。

「え、え…そそ、そっか、ってえーっ！？ハガキの内容聞いたんだ…」

今度は井上さんが慌てふためいてる。

まるでさっきまでの自分を見ているようで何かおもしろかった。

最初俺の心の中で悶々としていた気持ちはもう既に完全に晴れてしまっていた。

むしろ今のこの状況が続いて欲しいとさえ思っている自分に驚いている。

しかしそんな楽しい時間も長くは続かなかった。

「あ、ごめんなさい。私そろそろ部活に行かないと…今日は時間と

らせてごめんなさい」

井上さんはそう言って、丁重にお辞儀をして教室から出て行った。

今の俺にはその後姿を見送ることしか出来なかった。

第八話 放課後の対話（後書き）

今までほとんど本文の修正はしてこなかったんですが、この話は一部修正させていただきました。本当は最初掲載させていただいたオリジナルを最後まで載せておくべきだと思いますが、ご了承ください。

第九話　そして翌日（前書き）

昨日の放課後の出来事は何だったのだろうか。主人公高岡隆はモヤモヤした気持ちで過ごしていた。

第九話　そして翌日

…眠い。

…凄く眠い。

昨日の放課後の空き教室での会話の後、井上さんを見送ってから俺は少しの間ボーっとしていた。

そして俺は何も井上さんに伝えられていないことに気づいた。

井上さんがハガキの投稿についてどう思っているのかもわからない
ままだ。

あの後時間があれば詳しい話も出来たんだろうが、部活に行くとい
ってさっさと出て行ってしまった井上さんを呼び止める術は俺にな
かった。

そんな肝心な所で何も出来ない自分を自己嫌悪しつつ、今後どうし
ようか、どうするべきか考えていたら家でも学校でもなかなか寝付
けず相変わらずの睡眠不足が続いている。

「つーか絶対変な奴だと思われただろうな…」
話の途中でいきなりキレたし、ハガキの投稿していることも話して
しまったし。

でも、久しぶりに感情を表に出した気がする。

そして、久しぶりに本音を言えた気がする。

他人に思いつき感情を表すなんていつ以来だろう。

今までハガキ投稿のことなんて誰にも話してなかったのに…

肝心な部分は伝えられなかったけど、それでも気持ちが何かスッキリしているのはそういった理由だと思った。

そんな眠気と自己嫌悪のブルーな気持ち、また空き教室で感じた楽しい気持ちが混じり合った不思議なテンションで窓の外を眺めていると、

「隆ー、何やってんだよー？何か変だぞー」
学がいつものテンションで話しかけてきた。

「いつも通りだって。寝不足で眠いだけ…」
あまり詮索されたくないで素っ気無くそう言った。

「いやいやいや、寝不足だけじゃないんじゃないの？ほら、昨日のこととか…」

普段ならさっさと引き下がる学が珍しく食い下がってくる。

「というか昨日のことって…」

「お前っ、何で昨日の話知ってるんだよ!？」
普段出さないような大きな声で聞き返した。

「お前な、井上さんに呼び出されておいて何も話してくれないなんてつれないんじゃないの？」

…こいつ、どこまで知っているんだ。

というか学は昨日のあの時間既に部活に行ってて呼び出しのことは知らないはず。

「誰に聞いたんだよそんなこと。別に何にもないって」
俺は努めて平静を装った。

「誰からともなく言うか…井上さんが男を呼び出しただけでもちよっとした事件なのに、相手がお前だから余計に気・に・な・る」

それはそうだろう。（何か癪に障る言われ方だが…）

学年でも人気のある女の子が、クラスメートと距離を置いている何者かもわからない男子を名指して呼び出して二人でどこかに消えればいろんな噂もたつだろう。

「あいにく、何にもねーよ。ただ用事があつて呼ばれて、ちよっと話しただけ。井上さんはすぐに部活行つたし、俺もさっさと帰つたよ」

本当に面白くもなんともない答えだが、事実だから仕方がない。

「……ま、お前がそういうんならそうなんだろうけど。でもそこらじゅうで噂になってるぞ」

相手が相手だから仕方がないことだろう。

ある意味井上さん側から見ても相手が相手だから、と言えなくもないが。

どんな理由であれ目立ったり注目を浴びるのは好きではないが、今回ばかりは仕方がないと思うしかなかった。

それくらいのことをしたという自覚はあつたし、自分にとってマイナスなことばかりではなかったからそう思えるのかもしれない。

昨日のことがなければ今も本音を言えないままだっただろうし。
井上さんの目には昨日の俺がどう映ったかわからないが、俺にとっ
ては今までくすぶっていた思いや考えを出せた気がして心地がよか
った。

…でも、やっぱり人に噂されるのはいい気分ではない。
まあこのままおとなしくしておけばそのうちこんな話もなくなるだ
ろう。

そんな簡単に考えていた俺の予想の遥か斜め上に行くような出来事
が起こった。

「高岡君、ちょっといい？」

何と昨日の今日で井上さんに「また」話しかけられた。

これは…何だ？

誰かが俺を嵌めようとしているのか？

そんな疑いをかけたくなるような展開だ。

しかし井上さんは何も気にしないといった雰囲気でこちらを見てい
る。

そして今俺は井上さんと昨日のように話せるなら話したい気持ちと、
現在噂になっているこの状況が更に悪化するんじゃないかという考
えで心が揺れていた。

「もしかして何か用事でもあった？時間がなければ無理にとは言わないから…」

俺が返答に迷っていると、先に普段通りの井上さんの優しい言葉が聞こえてきた。

「え、いや、別に何かあるわけじゃないけど…い、井上さんはいいの？」

自分でも情けなくなるような返答だ。

「うん、部活までの時間は特にやることないし、話したいこともあるから」

向こうから話したいと言っているのにいいも悪いもないだろう、俺。

「わ、わかった。俺もいいよ」

もう声をかけられた時点で承諾しても断っても噂になるのは避けられない、ならばせめて話をしたほうが…と考えた。

「ありがとっ、じゃあ場所移ろうか」

井上さんは変わらない口調でそう言って歩いていった。

昨日と同じような展開だが、周りの視線は明らかに昨日より多く俺に突き刺さってきていた。

自分たちの教室で他のクラスメートがいる場所で井上さんと話すなんてことは絶対無理だが、いちいちこうやって二人で連れ立って場所を変えるというのも他の人から見たら怪しいよな…

むしろこちらの方が余計に噂をされる原因になっているのでは？そんなことを考えながら井上さんに先導されるままついていった。

…このままだと俺、注目を浴びることに耐え切れないかも。

第九話　そして翌日（後書き）

まとめ方がわからなくなってきましたorz

第十話 再・放課後の対話（前書き）

前日に引き続き井上京子に呼び出された主人公高岡隆。昨日の失敗をバネに今日こそはと意気込むが…

第十話 再・放課後の対話

二人は昨日話した教室にいた。

俺は心の中で「今日こそはちゃんと会話を成立させて、言いたいこと聞きたいことをちゃんと伝えるぞ」と意気込んでいた。

しかしあっけなくその目論見は井上さんの一言目によって崩されることとなる。

「昨日ハガキの投稿してるって言ってたよね？あの話詳しく聞きたいと思って」

いきなり一番突かれたくない部分を突かれた。

「あ、ああ、そのこと？投稿してるといっても全然たいしたことないよ。本当たまに思いついたことを書いてるだけだし…」

嘘をつくつもりはなかった。けど、何故かこんな風に話していた。相手が誰であれ、趣味の話をするには、まだ抵抗がある。

「そう、なんだ。じゃあどんなラジオ聞いているの？」

「そ、それは…いろいろ聞いているよ。〵〵とか。〇〇とか……」

「あー、それ私も聞いている！結構聞いている番組似てるかもね」

「あ、ああ、そうかもしれないね…」

会話が進むにつれて井上さんのテンションが上がっていくのが感じられると同時に、自分のテンションが下がっていくのがわかる。

俺だって同じ趣味を持つ人と、しかもその相手が井上さんでこうして話せることは嬉しいことのはず。

それでも何か気分が沈んでいくのは女の子と話し慣れてていない自分の性格によるものなのか、相手に本当のことを伝えられていない後ろめたさなのか…

「ところで高岡君はどんなPN使ってるの？」

その一言で俺の気分はどん底に落ちてしまった。

いつかはこの質問が来ることは予想できた。

俺は井上さんのPNを知ってしまったから。

井上さんも俺のPNを知りたがるのはわかっていたし、俺が言わなければならぬことになることもわかっていた。

それを避ける手もあつたはず。

ただ井上さんとの関わりを減らせばリスクは減らせた。

それでも井上さんと話したいと思う気持ちを抑えられなかった。

そう、全て自分の招いた事。

しかし、今はこの状況を何とか切り抜けようと必死に考えている俺がいる。

「いや、俺なんて全然ハガキ詠まれたことないし、井上さんに言うほどじゃないよ」

…なんて、そんな嘘をついたらどれほど楽だったか。

数日前、俺は千載一遇のチャンスを手に入れた。

井上さんがハガキを落とし、それを俺が拾うというチャンス。

もちろん俺はそのチャンスを使い井上さん「あんず」ということを確かめることができた。

そんな機会がなければずっと確かめることはできなかっただろう。

それまでの自分に井上さんとうとうして話す度胸なんてなかった。

…今も自分から話しかけることは難しいが。

でも、チャンスとピンチは表裏一体。

あのチャンスを生かしたが為に今こうして二人で話す場が設けられている。

俺の気の迷いが伝わったのか、先に井上さんが口を開いた。

「あ、高岡君が言いたくないなら言わなくていいよ。いつも私のほうばかり話しちゃってるし…」

俺の迷いを見透かしたかのように穏やかで優しい口調だった。

「同じ趣味持つてる人って知らなかったからつい嬉しくなって。迷惑掛けてごめんね。それじゃあ」

そついうと井上さんは教室から出て行った。

おそらく部活に向かったのだろう。

そして教室には自分の行動を恥じて一人後悔する俺だけが残された。
俺はもう一つの千載一遇のチャンスを逃してしまっていた。

「共通の趣味を持つ友人を作ること」

おそらく井上さんも勇気を出して話しかけてくれたはず。

自分で言うのもなんだが、クラスで……いや学年全体でも話しかけにくい奴の一人だと思う。

それは自分で招いた結果だからどうこう言つつもりもないが、そんな奴に話しかけてくれた井上さんの気持ちに踏みにじってしまった。

「俺は何をしたいんだろうな……」

そんなことを呟きながら空き教室で一人椅子に座りながらぼーっとしていた。

タタタタッ……

誰かが廊下を走る音が聞こえる。

何の気なしに教室から廊下を見ると、そこにはよく見知った顔があった。

「あれー、隆こんなところで何やってるの？」

俺の幼馴染兼バスケット部員の佐藤良美だった。

「……俺がどこで何してようと勝手だろ」

何も考えずに口を開くからこんな漫画チックなセリフになるんだよ。

「何そのセリフ。何かの真似？」

明らかに馬鹿にしたような態度。

変な所に食いついてくるんだな、全く…

「お前こそ何でこんなところにいるんだよ？部活の時間だろ？」
自分の話からさっさと話をそらせたかった。

「私は他の部活の友達に会う約束があつたからこっちに來ただけよ。
隆はなんでこんな使つてない教室にいるのよ？」

やはりしつこい。これだから幼馴染つてのは…

「じゃあさつさと約束済ませてこいよ。俺はもう帰るからな」

詳しい話なんて誰にもしたくなかった。

今からたった10分程前、天国と地獄を味わつたような時間だった。
あんな話、誰にも話せない。

「あ、ちよつと……」

良美の呼びかけを無視しそのまま教室を出て行こうとした。

「あー、もしかしてあの子と会つてたとかー？」

わざとらしく大きな声で言う。

「うるさいっ！」

気づくと俺は叫ぶように言い放っていた。

第十話 再・放課後の対話（後書き）

投稿が遅くなり申し訳ないです。体調不良だとか何かに忙しかったとかではなく、単に私の気持ちの問題です。これからもそれなりのペースで書いていく予定なので、拙い文章ですが少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第十一話 後悔と反省（前書き）

クラスメートの井上さんと2日続けて話した後、偶然幼馴染の良美が通りかかる。しかし事態は好転することはない…

第十一話 後悔と反省

「うるさいっ！」

俺の声が教室に響いたが、すぐに元の静かな教室に戻った。

窓の外からは運動部の掛声と吹奏楽部の楽器の音。

そして教室には俺と良美が無言で立っていた。

二人の間には完全な沈黙が流れていた。

お互いに次の言葉が出てこなかった。

お互いの顔すら見れていなかった。

「あ…、私そろそろ部活行くね」

沈黙に耐えかねたかのように良美がそう呟き教室から出て行くとした。

俺も何か言おうと思ったが言葉が出てこなかった。

こういう時普段のコミュニケーション不足が響く。

「…ごめん」

教室から出ていく良美の背中からそんな言葉が聞こえてきた。

俺は一人通学路を歩く途中、一言も言葉を発することなくずっと考

え込んでいた。

井上さんのこと、良美のこと……

どちらも俺が悪いのに、俺に原因があるのに相手に気を遣わせてしまった、謝らせてしまった。

俺は何がしたいのだろうか。

俺はどうしてこうなってしまったのだろうか。

そういえば最近こうやって人との関係で悩むことなんてずっとなかったな。

当たり前だ、それを避けるために俺は人との関係を希薄に保つてきたんだから。

クラスの可愛い子が自分とおなじ趣味を持っていたからって調子に乗って仲良くしよう、関係を良くしようなんて思って変な行動を取るからこうなるんだ。

例えば、自分が全然興味がない奴からラジオの事話されてもあんな風に対応しただろうか。

俺はいつも通り「何それ？」って興味の無いふりをして耳を貸さなかったんじゃないだろうか。

ああ、そうか。

俺は井上さんに興味があつたのか。

いや、厳密に言えばあの葉書の一件で興味を持ったと言つべきか。

他の連中だったら、例えば学だったらうまくやってるんだろうな。

俺みたいにテンパったり挙動不審にならずに井上さんと仲良く話して、お互いに楽しい気分であいられたはず。

そして今日も時間の許す限りもつといろんな話をして、笑顔で部活に行かせてあげられたかもしれない。

良美に対してだってあんな態度取らなくても済んだと思う。

俺は人間関係を希薄にすることによって人とうまくやっていけると考えて今まで生きてきたけれど、それは周りの全員と希薄にすることによって平穏を保てたに過ぎないことに気づいた。

どこかの誰かと仲良くなりたい、親密になりたいと思った時点で歯車が狂ってしまうことに気づいてなかった。

そして今回その「やってはいけないこと」をやってしまった俺にいい結果が出るわけがなかった。

家に帰ってからいろんな考えが頭に浮かんで、またすぐに消えた。

全て自業自得。

俺が辛い思いするのはかまわない。

ただ他の人を巻き込んでしまったのが辛かった。

こんな俺に話しかけてくれた井上さん、人との付き合いを極力減らしてきた俺に昔から変わらず接してくれていた良美。

どちらも相手は何も悪くない。

悪いのは俺。

だからと言ってどうすればいいか俺には全くわからない。

人づきあいをやってこなかった俺にとってはこういう人間関係での問題解決は無理難題に思えた。

こういふとき一番いいのは誰かに相談することなのだろうが、そもそも相談する相手もない。

しいて言えば学だが、学にどう説明したらいいか…

あいつにも俺の趣味のことは話してないし、井上さんの趣味まで話すわけにはいかない。

その話が出来なければ良美との話だって何も話せない。

普段ならラジオを聞きながら勉強してるかハガキ書いてるかしているような時間でも、俺はベッドに横になりながら問題の解決法を探っていた。

…気づくともう外は明るくなっていた。

どうも考え事をしながら寝てしまったらしい。

いつも通りの朝を過ごし、いつも通りの時間にいつも通りの道を通って学校に向かった。

教室に着くと普段は目も合わせたことのないようなクラスメートからの視線が痛かった。

どうせ昨日のことものろんな噂になっているのだろう。

俺には話す相手もないし、誰かに聞かれても何も話すつもりはない。

ただ相手は井上さん。

身近な女友達からクラスの男子まで、隙あらば井上さんと話したいと思ってる連中なんてあげたらキリがない。

大体昨日や一昨日の帰り、俺が井上さんに呼び出されたのを見ていた連中もかなりいる。

そこから変な噂が流れてることなんて想像に難くない。

そして噂がどんな内容であれ俺にとって好ましい内容であるわけがないのだ。

それでも直接俺に何かを聞いてこようとする人間がいないのはあり

がたい。

こればかりは普段の自分の行いがプラスに働いているのだろう。

ただもしどこかの誰かが勇気を出して俺に話しかけてきたら…

きっと俺はいつも通りの冷たい態度しかとれず、結局悪い方向へしか進まないだろう。

そんなことを思いつつ、表面的にはごく普通の一日を過ごすことになった。

そしてそれは俺が家に着くまで続いた。

今日は井上さんと話す機会が訪れなかった。

当たり前といえば当たり前のことだ。

ただ大切な何かを失ったような、ここ数年味わったことのない心の空白を感じていた。

第十一話 後悔と反省（後書き）

どうしてもアクセス数は気になってしまっていますが、特定の話以降大幅にアクセス数が減ってるってことは…力不足ですね、精進いたします。

第十二話 2対1（前書き）

井上さんとの2度の密会を（？）経て、いつもの暮らしに戻った隆。
しかし穏やかな日々は戻らず…

第十二話 2対1

早い時間に家に着くのも久しぶりに感じられた。

少し前はこの時間に当然のように自分の部屋にいて、今日のこの後の予定を考えて勉強するなり寝るなりしていたのに。

学と居残りで予習をやった日から日常が非日常に変わった。

自分と最も距離が遠いクラスメートと思っていた井上さんと話す機会があった。

その時間は本当に楽しかった。まさか自分にこんな時間が訪れるなんて考えてもみなかった。

でも終わってみれば所詮非日常は非日常。

非日常が日常に変わることはなく、今こうして元通りの生活に戻っている。

ベッドに横になりながら窓の外を見た。

雲はまばら、目一杯の青空が広がっている。

「こんなもの見てどうするんだ、惨めになるだけじゃないか……」
誰に話すわけでもない、独り言を呟きながら目を瞑り意識を沈めていった。

どのくらい寝ていただろうか。

親に食事の時間だと呼ばれて目を覚ました。

その時は気付かなかったが、夕食を食べたあと部屋に戻ってくると携帯のランプが点滅していた。

メールでも来てたのか？

と携帯を確認すると学からメールが来ていた。

要件は…んっ！？

本文

隆起きてるかー？

今日同じクラスの女の子が
お前に聞きたいことがある
って俺に言ってきた。

それで時間作ってほしいっ
て言われたから明日帰りに
セッティングするんでよろ
しく。

…って何だこの展開。

つか学軽すぎるぞ。

クラスの女子が誰なのかは知らないが、俺に聞くことがあるなんて今まで全くなかった。
学絡みの話をされたことはあっても、俺について聞きたいなんていう物好きはいなかった。

これはどう考えても井上さん絡みの話だよな……

今日は何もなかったとはいえ昨日一昨日の行動は目立つものだったし、変な目で見られたり変な噂をたてられても仕方がないとは思っていた。

実際俺に対する今日のクラスの雰囲気は何かおかしいと感じた。
もともとクラスから浮いているのは感じていたが、基本的には気にされてないといった感じだったと思う。

でも今日は興味を持った視線というか、好奇の目で見られているような感じだった。

なんにせよこうなったら腹くくって話し合いに参加するしかないか。
おそらく学自身も気になっていたからクラスの女子の求めに応じてセッティングしたんだろうし。

もう逃げられない。

今までこうだった煩わしいことから逃げていたツケが回ってきたように感じられたが、同時に今の状況を打破するきっかけになるかもしれないと思う自分がいた。

その夜は明日の放課後の事が頭に浮かんでなかなか寝付けなかった。

翌日教室に着くと何食わぬ顔で学が挨拶をしてきた。

「おはようさん」

「おはよ」

「…何かいつにも増して反応悪いんじゃない？」

「理由は自分の胸に聞いてみるよ」

「楽しみにしてるよ」

学は全く悪びれることなく、女子が見たら一発で惚れそうな満面の笑みでそう答えた。

いつも通り、いつも以上に授業は上の空。

うとうとして、寝て、また起きて、うとうとして…

表面上は普段通りの一日だったが、時間が過ぎるに従って緊張感が高まってきた。

そして放課後。

HRが終わり学と二人でそそくさと教室を出ていく。

本当は教室で集まる方が便利なのだが、人目がなくならないのと人がいなくなるまで待っている時間がない（部活の関係で）ため違う教室に行くことになっていた。

とある空き教室に学と二人、お互いに一言も喋らずに人を待っていた。

俺はいまだに誰が来るか知らなかったが、誰が来ても話の内容は同じなので全く気にしていなかった。

ただ何をどこから話すべきなのか、話さないべきなのか…
それだけを考えていた。

時間はそれほど気にしていなかったが、おそらく5分ほど時間がたっていた。

同じクラス（であろう）女子が二人やってきた。

二人は学に一言声をかけ、そしてこちらを向いた。

こちらには何の挨拶もなく、いきなり本題から入ってきた。

「高岡君は京子の事どう思ってるの？」

…これからどれだけ容赦ない罵声が浴びせられるだろうと考えていた自分には拍子抜けするような言葉だった。

ただその言葉に反応できずにいると、

「京子に何したの!？」

もう一人の女子が強い口調で言った。

正直驚きと戸惑いで今まで何を話そうかと考えていた内容はどこかに行ってしまった。

チラッと学の方を見ると、こちらを苦笑いしながら見ているようだ

った。

…苦笑いと普通の笑いが半々に見えなくもないのは気のせいだろうか。

女子二人はこちらを見たまま視線を動かす様子もない。

俺は目を泳がせながらどう答えたものかと必死に考える。

勉強のように習ったことを活用するのには慣れているが、こういったぶっつけ本番の出来事は苦手だと言うことを再認識してしまう。

そんな俺がようやく一言。

「何もしてない…」

二人の女子は顔を見合わせ、再度問い詰めるように

「何もなかったわけじゃない！京子が高岡君と二人で会ったことはわかってるし、京子があんな風になったのもその後なのよ」

「私たちも京子と高岡君の間で何があったかわからない。でも、一番身近にいたのは高岡君だから。京子に聞いても何も話してくれないし…だから今日時間をつくってもらったの」

「井上さんがどうなったって!？」

俺は珍しく強い口調で話していた。

…最近はそれほど珍しくなくなりつつあるが。

「私たちは京子と中学校からの友達なの。ずっと京子と一緒にいる

けど、あんなに元気のない京子を初めて見たから不安になって…」

「高岡君と一緒にいた後に京子があんな風になったから、原因は高岡君にあるとしか思えないんだけど？」

常にステレオで責められる俺の唯一の味方のはずの学は…

あ、必死に笑いこらえてるわ。

確かに二人の言うとおり原因は俺にあるだろう。

ただ何か言ったわけでもないし、何かしたわけでもない。

むしろ質問に反応のない俺が飽きられて、また元のクラスメートに戻るだけだと思っていた。

正直な所、井上さんの変調の理由が俺にもわからなかった。

第十二話 2対1（後書き）

大変投稿が遅れまして申し訳ないです。正直自分でも前までの話を忘れていて、見直しながら書きました。もしお時間があれば以前の話をみつつ最新話を見ていただけると幸いです。

第十三話 気づき（前書き）

学の策略によりクラスメートの女子と話し合いをすることになった
隆。この出来事がどのような影響を与えるのか…

第十三話 気づき

「本当に何もしていないんだ」

どこかの取調室の容疑者のような言い訳をしていた。

クラスメートの女子二人によると、井上さんが俺と会ってから元気のない状態が続いているとのこと。

理由を聞いても何も話してくれず、とても心配だということ。

何とか原因を突き止めたい一心から、最近井上さんの近くにいた俺と話す時間を作ったということだった。

俺も話を聞くうちに井上さんのことが不安になり、何か自分に原因はなかったかと考えたが思い浮かばなかった。

確かに素っ気無い態度と言うか、本心を隠してしまったのは事実。しかし、それくらいで井上さんがショックを受けることだろうか。

こんな言い方をすると誤解を招くかもしれないが、俺にとっては「一般人の」人付き合いの感覚がわからない。

極力人との付き合いを避け、それでも友人として身近にいてくれる学を除き友人らしい友人がいない俺にとって、一般的な人付き合いをしている人（しかも異性）がどういうことでショックを受けるかなんてわかるわけがない。

そういうことがわずらわしくて人付き合いを避けてきたんだから当然と言えば当然なのだが。

しかし井上さんの友人の女子二人は、さも俺が何かやったかのように問いただしてくる。

そう思われても仕方のない状況になっていたからいろいろ聞かれるのも仕方ないが、さすがにうんざりしてきた。

その空気を読んだのか、今まで沈黙を守っていた学が口を開いた。

「そろそろ部活もあるし、今日のところはこれでお開きって事でどう？お互い感情的になってもいい結果は出ないだろうしね」

女子二人は納得いかないという顔をしつつも、自分たちの部活や学の部活のこともあるため仕方ないといった様子で教室から出て行った。

「助かった。サンキューな」

俺は心の底からそう思っていた。

すると学はこっちを向き、

「お前が嘘をついてるとは思わない。でも、自分にとって大した事じゃなくても相手にとっては大きな出来事であることもある。今回のことはきつと井上さんにとって一大事だったんじゃないかって思うよ」

そういつて教室から出て行った。

…きつと学の言つとおりなんだろう。

お互いにお互いの理解が出来ない。

こついうことが嫌で人付き合いをしないようにしてきたのに。

結局何か起こってしまったときには何もわからない。

…今までそういった経験がないから。

小学校、中学校と多くの人間と知り合い、その中で人付き合いを学んでいく。

そしてほとんどの人間は自分の人付き合いのスタイルを見つけているんだと思う。

俺はその過程で人付き合いをしないことを選んだ。
それはもう昔の事のように感じる。

こんな自分でも時々思うことがある。

「学みたい人付き合いが出来ていたらどうなっていたんだろうな」と。

学の真似が出来ないことなんて自分が一番わかっている。

あいつは誰に対しても平等で、誰に対しても良い友人である。

物心ついたあたりからずっと一緒にいるが、あいつが敵を作ったことを見たことがない。

あいつの敵になるほどの相手がいなかったのかもしれないが。

小さい頃から元気で運動神経抜群、勉強はそれなりだったけど誰とでもよく話し誰とでも仲良くなれるクラス、いや学校の人気者。それは高校生になった今でも健在だ。

俺みたいに性格がひねくれた奴じゃなければあんな人気者に楯突こうなんて思わないだろう。

…俺もあいつに楯突こうなんて思ったことないが。

他に友人がいらないんだから当然と言えば当然だが、唯一無二の親友だと思ふしあいつの存在ほどありがたいと思ふものもない。

今更ながら俺は人を好きだとか嫌いだとかそういう感情すらずっと持ってなかったと思う。

自分と他人、その二つの分けしかなかった気がする。

それで十分だった。

杏〓井上さんに会うまでは。

最初は少し気になる程度だった同じラジオのリスナー。そして相手のハガキが読まれるにしたがってライバル心が湧いてきた。

もしかしたら杏〓井上さんの友人関係のネタが自分には書けないものだったから余計に気にしていたのかもしれない。

友人なんてほとんどいない俺にそんなネタは想像したって書けない。想像できない。

テストの点数や学校の成績は努力で何とでもしてきたが、友人関係をほとんど気づいてこなかった俺には辿りつけない領域だった。

今更だが、やっと気づいた。

俺は杏〓井上さんの環境が羨ましかったんだ。

杏と言うリスナーに対して抱いていたのはライバル心というより嫉妬心。

同じ高校生と言う立場にありながら全く逆の道を歩んでいる相手。

今までずっと「自分で選んだ道」と耳を塞ぎ目を閉じてきた現実。

俺も人並みの学生生活をしたかったんだな。

学のように、はいかないだろうが何人かの友人と一緒に遊んだり部活をしたり。

いつそれを諦めたか思い出したくもないが、それ以来ずっと燻って

いた気持ちが復活したような気分だ。

こんな当たり前の結論に達するのに何年費やしてるのか、自分でも馬鹿らしくなってきた。

…もう、帰るか。

第十三話 気づき（後書き）

ずいぶん間が空いてしまいました。前の話を思い出しながら見ていただけると幸いです。

想像を膨らませるも…（前書き）

人生最大（？）のピンチを抜け出し帰宅した降。最近起こったことを思い出しながら物思いにふけったりしてみたものの…

想像を膨らませるも…

俺にとっては地獄のような話し合いが終了し、学とクラスメートの女子二人は部活へ。

その姿を見送り、俺は相変わらず何もすることがないのでまっすぐ帰路についていた。

「今更普通の学生生活といってもなあ…」

周りに人がいないことを確認しつつ独り言を呟っていた。

普通の学生生活がどういうものか、何となくイメージは湧く。ただそれを自分が過ごしてるイメージは全く浮かばない。

…決して「普通」というのが嫌いなわけではない。

むしろ学園モノの話に出てくるような世間一般に言われる学生生活には憧れていた。

もしかしたら自分の趣味が違ったらそういう道も歩めていたかもしれない。

極々一般的な、万人にも受け入れられるような趣味…

でも、それも今となってはどうにもならないこと。

趣味を増やすことは出来ても、減らすことなんてできない。

…いや、一日が24時間である限り増やすことも難しいか。

そう感じるほどに、俺は今の趣味を生活の中心に置いて生活している。

学生にとっては不可欠な勉強も、生きることにとって重要な睡眠も趣味に合わせて取っている。

そして、その毎日が自分に一番合っている。
そんな毎日に満足している。

…いや、満足して「いた」と言うべきかもしれない。

今の自分は今の自分に決して満足していない。
以前の自分より今の自分は欲張りになっているんだと思う。

今まで経験してこなかったことを最近経験して、そこから新しい自分が見えた気がする。

と言ってもこの状況は何も変わらないわけで。

何とかこの状況から脱する手立て、もしくはこの状況を打開するような答えを欲して考えを巡らせていたがどうしても思いつかず結局そのまま家に着いてしまった。

帰宅途中「わからない」という単語を何度口にしたかわからないが、傍から見たら怪しさ満点の男子高校生となっていただろう。

まあ終わったことは終わったこと。

これから重要なのは趣味の為に生活リズムを回すことだ。

部活も何もやってない俺の帰宅はとびきり早い。

勉強なんていつでも出来るんだが、帰宅から夕食まで時間があると中途半端に寝るのも嫌だから勉強の時間に使う事が多い。

しかしこんな生活を何年も続けてきて。こんなに勉強に身が入らな

いのは初めてかもしれない。

今までの人生が薄っぺらいものなんて考えたくもないが、そう思えてしまうほどここ数日は「濃い」日々だった。

井上さんとのラジオ話に始まり、クラスが離れて疎遠になっていた良美との久しぶりの会話、そして今日のクラスメートの女子からの尋問。

どう考えてもハードルが上がり過ぎている。

ついこの前までほとんど誰とも話してこなかった人間に対してこんなに会話を積み掛けるなんて、上手い返しやカッコいい言葉を求める方が間違ってる。

というよりも、普通の返しすら出来てなかった気がする…

あの時はどう言えば、こういう時はああいう返しの方がよかったんじゃないあ…

その後も教科書や参考書、ノートを机の上に広げたまま答えの出ない問題を必死に解いていた。

くだらだら勉強しているとなかなか時間は過ぎないものだが、よっぽど考え込んでいたんだろう。

気付けば親に夕食の時間だと呼ばれていた。

さっさと食べるものを食べ終え、いつも通り睡眠に入る用意を始めた。

今日は、というか厳密に言うと明日になるが、聴いているラジオの番組上かなり朝早くまで起きてる事になる為早く寝るに限る。

それでも結構体には気をつけてるんだぜ。

元々体が強い方ではないし、どんな番組でも聴いてるわけじゃない。ある程度は絞って聴いているんだけど、ほとんどの番組が深夜である為こんな生活をしているだけだ。

もちろんリアルタイムだけじゃなくて、録音とかしてるのもあるぞ。でもやっぱりリアルタイムで聴いてた方が色々と反応しやすいし、メールが主流になっても葉書やFAXを送るという手も十分使える。もし同じラジオを聴いてるリスナーが身近にいれば、明日会った時に感想を話せたりもするし。

…今まで一度もやったことのないことを例に挙げてても全く説得力がないことに改めて気付かされた。

まあまあまあ、百歩譲って（譲られて？）同じラジオを聴いている子…じゃなくて聴いてる奴が身近にいたとしよう。

それで万が一にでも自分から…は無理だから相手からラジオについて話しかけられたとしよう。

ラジオの話なんて大概読まれたネタや定番コーナーを聴いた感想だから、俺は感想を言うべきなんだろう。

…いや、全くそこで感想を話してる自分の姿が想像つかない。というより、これに近い展開が少し前にあった気がするののは気のせいだろうか。

あー、どう考えても俺には無理だ。

考えるまでもない結論を出し、いつも通りの生活が続けることになった。

想像を膨らませるも…（後書き）

久しぶりに覗いてみたら「1年以上更新されておらず次話が投稿される可能性が大変少ない…」みたいなことになってました。それに触発されたわけでもありませんが久しぶりに投稿してみます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6725f/>

俺と彼女の関係性

2011年10月5日16時09分発行